■西都原発　考古学ノート

明治人の見た中世山城

1877（明治 10）年に起こった西南戦争は、近代日本における最大・最後の内戦である。一般的に西南戦争といえば、西郷隆盛らを輩出した鹿児島県、熊本城や田原坂など著名な戦跡を擁する熊本県のイメージが強い。しかし、戦争の後半期である６月から８月にかけては、現在の宮崎県にあたる地域（当時は鹿児島県に併合されていた）が主戦場であったし、宮崎県再置を目指す分県運動のきっかけとなった点からも、本県にとって重要な意味を持つ事件だった。

司馬遼太郎の『翔ぶが如く』では、鹿児島へと落ち延びていく最中に西郷が薩軍幹部の一人である野村忍介に単身で蒲生城（龍ヶ城とも。鹿児島県姶良市所在）を守備するよう命じるシーンがある。「戦国末期に鉄砲が普及してからは、何の役にも立たなくなった」中世の山城を「ひとりで」守れという「異常な命令」を描くことで、西郷と野村の関係破綻を象徴的に表現したのであるが、「ひとりで」の部分はともかく、近代戦において中世山城を守備拠点とすることは果たして無意味であったのだろうか。

というのも、官軍（陸軍）の公式記録である『征西戦記稿』をめくると、あちこちに中世山城に関連する記述が出てくるのである。例えば、薩軍が最終的に立てこもった「城山」は、江戸時代の鹿児島城（鶴丸城）において詰城としての役割を果たした部分で、中世の上山城を踏襲しているし、宮崎県内の事例としても、巻 50「高原戦記」にある「高原古城山」が高原城（高原町所在）、「陣跡山」が岩牟礼城（小林市所在）を指すと考えられる。さらに、記録等にいっさい残ってない山城を踏査している際に、西南戦争の陣地跡を発見することも珍しくない。

西南戦争当時、明治政府は江戸時代の国絵図（幕命により各藩が作成した国単位の絵図）や伊能図（伊能忠敬が作成した地図）をベースとした地図しか持たなかったので、官軍は戦地の詳細な地理情報を把握するために、地元住民を案内者として利用したらしい。そして、上記のような山城の現地遺称が記録に頻出することからみれば、官軍は中世山城に戦略的な重要性を見いだしており、むしろ山城の伝承を聞き回っていたとさえ考えられる。また、それらの山城がしばしば争奪戦の舞台となっていることから、薩軍側も同じような認識の元に行動していた可能性が高い。実は、司馬が取り上げたエピソードは、薩軍側の視点からまとめられた『薩南血涙史』中にみえるのだが、こうしてみてみると、司馬の解釈とはまた少し異なる光景が目に浮かぶのである。

西南戦争に関しては官・民さまざまな立場から膨大な記録類が残されており、現代の我々にとって西南戦争という近代戦がどのように戦われたのかを伝える貴重な資料となっている。それとともに、明治時代の人々が中世の山城跡をどのように見ていたのかも垣間見せてくれる。

（堀田孝博）

七月十四日
第二旅團

是日我略収ニ係ル粟野及ヒ其近郷村落ニ貯藏ノ米數百石ヲ發シ難民救恤ノ用ニ供ス（地方官ノ請求ニ因ル）

十四日午前三時第二旅團三道ノ先鋒分レ發シ其正面軍進テ堤川ニ至ル川ハ堤村ヲ彎回シ其前岸ハ即チ高原古城山ナリ賊其要衝ニ據リ密柵ヲ樹ツ堅壘數十ヲ左右山上ニ築キ嚴ニ防守シ我兵ノ進行河溯ニ達スルヲ認ムルヤ其數十ノ砲壘ヨリ劇烈ニ發放ス我兵モ亦大小銃砲ヲ以テ猛烈ノ火擊ヲ爲シ將ヲニ流ヲ亂テ進ントスルノ狀ヲ示シ而シテ潛カニ之ニ應シ二中隊（中谷水野二大尉）ヲ分テ川ノ上流ヲ渉リ中谷ハ其右ニ、水野ハ其左ニ迂回シ且ツ射且ツ逼リ其數壘ヲ奪フ賊軍色動ク參謀本多大尉此機ニ乘シ單身刀ヲ提テ挺前ス諸兵之ニ繼キ先ヲ爭ヒ流ヲ亂シ躍テ前岸ニ上リ柵ヲ破テ進ム近藤大尉入江中尉ハ工兵三分隊ヲ督シ彈丸雨注ノ下ニ至テ竹筏ヲ建テ二十五米突ノ急造橋ヲ架シ更ニ進テ賊柵ヲ拔キ諸隊ノ進入ニ便ス賊、支フル能ハス遂ニ其前面一帶數十ノ壘ヲ棄テ走ル壘內賊屍相依リ流血地ヲ漬ス間道諸隊ハ本道ノ開戰ヲ聞クヤ直チニ疾驅シテ古城山ノ両側ニ出ツ是ニ於テ三面合擊兵益〻駭キ壘ヲ其壘ヲ棄テ潰ユ我軍尾擊遂ニ高原麓ヲ取ル時猶ホ午前七時ナリ乃チ又兵ヲ分テ敗賊ヲ逐ヒ又更ニ斥候二中隊ヲ高崎及ヒ野尻街道ニ出シ是ノ両麓ヲ偵ハシム高崎復タ一賊ノ留マルナシ因テ歩兵四中隊（出羽伊藤両大尉島野松本両中尉）ヲ以テ大哨兵ヲ高原麓ニ排シ同二中隊（松村中尉粟屋大尉）ヲ以テ廣原細野ノ両村ニ屯シテ之カ援隊タラシメ更ニ一中隊（水野大尉）ヲ以テ豫備隊トシ高原麓ヨリ廣原細野両村ニ至ルノ守線ヲ巡邏シ其餘諸隊皆小林麓ノ舊守線ニ

『征西戦記稿』巻 50「高原戦記」（青潮社による復刻版）より引用

赤線部分に「高原古城山」とある。

引用・参考文献

加治木常樹　『薩南血涙史』（青潮社　1988 発行）

参謀本部陸軍部　『征西戦記稿』中巻（青潮社　1987 発行）

司馬遼太郎　1980　『翔ぶが如く（十）』文春文庫